

## 臨牀小實驗例

岡山醫學士 島岡厚吉

- 一、溺死體ノ火傷
- 二、痘瘡ニヨル外鼻孔全閉鎖症
- 三、脊髓破裂症
- 四、直腸閉鎖症
- 五、苛性カリ誤嚥(中毒) 以上

## 第一 溺死體ノ火傷

溺死者ヲ引上ゲテ蘇生セシムル目的ニテ之ヲ焚火ヲ以テ温ムルコトハ古來ヨリ一般ノ習慣トシテ醫師ガ診療ニ來ルマデニ盛ニ行ハル、所ニシテ而モ其咄嗟ノ場合近親者ガ溺者ヲ一意蘇生セシメントスル熱心ノ餘リ知ラズ識ラズ溺者ノ體部ヲ火焰ニ近カヅケテ當該溺者ノ一定ノ身體部分ニ火傷ヲ形成セシメ檢屍ニ臨メル警察官ヨリ該溺死者ノ火傷ガ直接死因ニ關係アルヤ否ヤ又然ラズトモ故意ニ形成セラレタルニアラザルカヲ尋問セラル、場合往々ニシテ之ヨリ斯ル際「溺死屍ノ火傷」テフ甚ダ矛盾極ル問題而モ實地上稍々緊要ナル提案トシテ立會人タル吾人ニ其明快ナル解決ヲ要求セラル、場合少シトセズ。

而シテ溺死者ヲ温ル焚火ノ材料ハ麥稈又ハ藁ヲ以テシ、溺者モシ小兒ナルトキハ數人ガ溺者ノ四肢ヲ把持シ火焰上ニ持チ來リ甚シク火焰ニ近ケテ專念温包シテ其最大目的ヲ貫徹セントシ當該溺者ノ背部又ハ腹面竝ニ四肢等ニ火傷ヲ形成セラル、也。

## 實驗例

第一例 堀井〇三郎、男、五歲、大正四年四月十一日午後二時頃遊戯中

自宅入口ノ尿壺ニ陥リ溺死ス、火傷ハ背部ニ廣汎ニ存シ側腹部ニモ及ベリ  
絶命後約五十分時間後ニ診ス、尙ホ診察直前マテ焚火ニテ盛ニ屍ヲ温メ居

タリ。

第二例 吉岡〇クエ、七歲、女、大正四年十一月十日午後三時頃自家便、  
所ニテ用達中踏板ノ開孔部ヨリ足ヲ滑ラセ誤テ糞溜中ニ墜落、火傷ハ背部

及ビ上肢伸展側及ビ臀部ニアリ軽度ナリ絶命後約一時間後ニ診ス、本例ニ  
テモ亦薬ヲ焚キテ屍ヲ温メ居タルヲ見タリ。

第三例 久保○代治、八歳、男、大正五年九月四日午後一時頃朋友ト共

ニ村内貯水池ニ游泳中誤テ溺死ス、絶命後約一時間以上ヲ經テ診ス、火傷  
ハ腹部、側腹部及ビ背部ニ廣汎ニ存ス。

尚ホ詳記スレバ各例火傷ハ勿論形成後短時間ヲ經タル新鮮ナルモノニシテ、第一例及ビ第三例ハ廣汎ナル背部及  
ビ腹部ニ第二度火傷ニ準ズベキ程度ノ火傷アリ而モ火傷周圍皮膚ニハ生體火傷ニ存スルガ如キ紅暈等ハ全クナシ、  
水泡ハ形成セラレシヲ見ズ。

(死後火傷ノ特徴) 而シテ火傷程度稍々高度ナル部分ハ稍々皮膚乾固シ硬ク脂肪性「スクレレーマ」狀硬度ヲ存シ  
周圍皮膚ヨリ少シク隆起シ表面黃褐色ニ變ゼル部ヲ存ス(火焰ニ觸レタル部及ビ烟ニヨル汚染)其以外ノ火傷部ハ表  
皮糜爛シ觸ルレバ容易ニ表皮剝脱ヲ來ス。

上記各例共臨檢警察官ハ溺死體ノ火傷アルニ疑義ヲ挾ミ、生前故意ニ形成セラレシニアラザルカ、又ハ死因トシ  
何等カノ意味アルニアラズヤト吾人ニ其解決ヲ要求セラレタルガ其死後火傷タル證徴ヲ陳述シテ其責任ヲ全クシタ  
ルモノナリ。

## 第二 痘瘡ニヨル外鼻孔全閉鎖症一例

奈良縣磯城郡纏向村 農 ○村○松 母 ○カ 八十六歳

本例ハ戸主○松ガ尿毒性發作ヲ起セルヲ診療中偶然發見シタル所ニカ、ル。

本人ニ就テ聽クニ其六、七歳頃大流行ヲ來セシ重キ痘瘡ニ犯サレ瀕死ノ境ヲ彷徨シテ治癒シタル際ニ斯ク鼻孔ガ  
閉鎖セラレタルモノナリト、診スルニ左右兩鼻孔ハ厚キ癩痕狀膜ニテ平等ニ全然閉鎖セラレアリ、鼻翼、鼻背、  
鼻中隔等正常形ヲ呈シ變化ナシ唯ダ痘痕ヲ有スルノミニシテ他ノ火傷、外傷、微毒等ニヨル鼻ノ變化ト明カニ區別

シ得談話ニ際シテ鼻翼及ビ外鼻孔ヲ閉鎖スル膜狀物ハ膨出シ又陷凹シ頗ル奇觀ヲ呈ス、嗅覺ハ全缺損ス。  
整形外科手術ヲ薦ムルモ老年ノ故ニ決定セズ。

### 第三 脊髓破裂症 Spina bifida (Rachischisis)

奈良縣磯城郡纏向村 農 ○村○松 二男 ○村○次郎 生後二日目

兩親ハ農ヲ業トシ、畸型ノ遺傳ナシ、父ハ健、母ハ本兒ノ妊娠中痔核(痔出血頻回反覆)脱肛及ビ十二指腸蟲寄生ニヨリ高度貧血アリ、同胞三人(二人ハ男、一人ハ女)皆ナ健全ニ發育シツ、アリ。

分娩機轉平滑ニ經過シタルガ生下兒ノ腰背部ニ怪腫瘤ノ存スルヲ老助産婦ガ發見シ吾人ノ診ヲ受ク。

主訴 腰部ノ怪腫物。

即チ本症ハ脊髓破裂症ニシテ本患者身體他部コトニ頭蓋骨ハ著明ニ發育不完全ニシテ各顱門ハ正常兒ヨリモ遙ニ大ナリ、下肢ノ發育ハ大ニ障害セラレ兩足ハ内翻足ヲナス。

初診(大正四年五月初旬)後二十一日目ニ及ビ腫瘤ノ外表潰瘍面ヨリシテ化膿ニ陥リ加フルニ尿管ニテ甚シク汚染セラレタルト患兒ノ生活力薄弱ナルガ爲メニ化膿ハ延テ腦膜炎ヲ誘起シ遂ニ死ノ轉歸ヲトレリ。

診スルニ、腫瘍ハ直徑八仙米圓形ニ近ク高徑約二・〇仙米ニシテ全形餅狀ヲナシ基底ハ下部胸椎ヨリ薦骨ニ渡ル脊柱裂隙部ヨリ發生セリ腫瘍外表ハ汚穢暗紫色ヲ呈シ地圖狀痂皮ヲ被ムレル潰瘍面ハ表面ノ大部分ヲ占ム、腫瘍ヲ觸診スルニ柔軟ナル護膜囊ニ觸ル、ガ如ク緊張ハ弱シ内容物ハ水樣液體ニシテ(腦脊髄液)脊髄内腔ト交通ス。

本腫瘍ノ摩スル部分ハ第十二胸椎ヨリ腰椎全部及ビ薦骨上端ニ達スル方錘形裂隙ヲ形成ス其部各椎橫突起ハ半完成ニシテ各棘狀突起ハ全缺シ要スルニ當該部分ノ脊椎管ノ後壁ハ未完成ニシテ完全ナル脊髓破裂症ニシテ該腫瘍狀物ハ脊髓膜ガ「ヘルニア」狀ニ裂隙ヨリ突出セルニ外ナラズ、即チ脊椎管ノ前半ハ溝狀ヲナシテ上下ニ經過シ其兩側

ニハ發育不全ノ横突起ハ上ヨリ下ニ彎形ニ列シ左右兩側ノモノ互ニ上下兩端(裂隙ノ)ニテ會シテ舟狀ノ空隙部ヲ形クレリ此最大幅徑三・〇仙米ナリ。

エフ、モリッツ氏ノ記載(メーリング内科書第八版八九二頁)ノ如ク本腫瘍ヲ壓迫スレバ腦内壓昇騰ノ症狀—上下肢痙攣、各顫門ノ膨出、眼球上竄等ヲ呈ス。

#### 第四 直腸閉鎖症

奈良縣磯城郡纏向村 吉田〇ツ〇 第一女 生後三日

主訴 胎便不通及ビ腹膨滿。

本兒ノ妊娠中母體ニ異狀ナシ分娩モ平滑ニナサレタリ、母ノ妹ハ兔唇(第一度)ヲ有スル外ニ畸型等ナシ、父方ノ遺傳等不明。

本兒ハ發育良好ナル女兒ニシテ體溫常苦悶性顔貌アリ口ヨリ時々粘液ヲ混ズル膽汁様物ヲ少量宛吐出ス、生下後胎便少シモ排泄ナシ腹部ヲ診スルニ蛙腹狀ニ膨滿シ大腸經過ニ沿ヒテ腸蹄係ノ膨隆ヲ認ム腸蠕動亢進及ビ「グル」音盛ニ起ル、腸下部ニ於ケル疏通障害ニヨル「イレウス」ト診定試ミニ「グリセリン」灌腸ヲナサントスルニ硝子灌腸器嘴管ガ約一仙米許肛門ニ入ルノミニシテ其レヨリ挿入不能也、即チ小指ニ「ワセリン」ヲ塗布シテ挿入スルニ肛門ヨリ一仙米上ニテ直腸腔ノ形成セラレザルヲ知レリ。

診斷 直腸閉鎖症。

直チニ學兄奥山周達氏ノ外科ニテ手術ヲ受クベク照會狀ヲ與ヘテ患者ヲ送ル。

後日奥山氏ニ聽クニ直腸ハ肛門ヨリ上方一仙米ニシテ閉鎖切開スルコト約三仙米餘ニテ盲端ニ終レルS字狀下端ヲ發見下部直腸ノ一部トヲ縫合シテ術ヲ終リ其後約二週日ニテ抜絲經過良好ナリシガ後腹膜炎ニテ死亡セリ。

## 第五 苛性加里中毒

奈良縣磯城郡纏向村 ○岡○キ 女 二十五歲

大正八年三月十一日午前九時頃起床直後(空腹ナリ)胃部膨滿及ビ惡心アリシ故家庭用「重曹」ヲ飲用セントテ誤テ一般漂白用ニ用フル罐入「苛性加里」ヲ約指頭大ノ潮解セル塊(大約二十瓦?)ヲ嚥下シタリ、同時ニ口内及ビ胃部ニ烈シキ灼熱及ビ疼痛ヲ感ジタル故多量ノ水ヲ嚥下シ引續キ五六回嘔吐シ、尙ホ水及ビ溫湯ヲ嚥下シテ數回嘔吐シタリト云フ。

患者ハ平常健ニシテ著患ヲ經ズ唯ダ兩側慢性中耳炎ヲ有スルノミ、初診ハ誤嚥後約七時間ニシテ患者ハ營養良好體質稍々強壯ナル女子顔面蒼白顔貌頗ル苦悶ヲ呈ス體溫三十八度、脈一〇四至、嘔吐ハ既ニ止ム、主訴ハ咽頭食道胃部ノ烈シキ疼痛ニシテ發作性ニ激烈ニ發來シ床上ニ輾々セリ、疼痛ハ背部第十胸椎ノ高サ迄脊柱兩側ニ沿ヒテ烈シク襲來ス、此部ハ他覺的ニハ何等症狀ナシ。

口内ヲ診スルニ軟口蓋ヨリ咽頭ハ甚シク發赤腫脹シ灼熱疼痛甚シク、音聲ハ嗄嘶ス、咽頭性咳嗽甚シク患者ヲ困マシム嚥下作用ハ咽頭食道ノ腐蝕ノタメ不能ニシテ一滴ノ水ヲモ嚥下スルアタハズ、流涎甚ダ盛ンナリ。

斯ル狀態ナル故經口的解毒劑ノ應用ハ不可能ナルノミナラズ誤嚥下後稍々時間ヲ經タル故解毒劑ハ用ヒラルトスルモ無效ニ終ラントス。

心臟高度ニ衰弱セル故二〇%「カンフル」油一筒及ビ鎮痛ノ目的ニ一〇%鹽酸「モルヒネ」ヲ皮下注射ス、頸部氷菴法及ビ氷片ヲ口内ニ含マシム、斯ル場合「カテーテル」ヲ用ヒテ胃洗等ヲナスコトハ疼痛ノタメ患者ノ堪ヘダタキ所ニシテ且又濃厚ナル「アルカリ」ニヨリ腐蝕セル食道ニ「カテーテル」ヲ挿入スルコトハ利及ヲ擬シテ其生命ヲ斷タントスルニ異ナラズ。

發症後餘リニ時間ヲ經過シタリ、此夜患者疼痛ト倦怠トニヨリ終夜不眠。

三月十二日 午前八時診、脈搏及ビ體溫前日ニ大差ナシ、二〇%「カンフル」油二筒及ビ「デイガレイン」一筒注射本日煩渴アリ、〇・八%食鹽水、一八〇〇・〇瓦チ「カテーテル」ヲ介シテ深ク結腸ニ注入ス、嚥下不能、咽頭性咳嗽甚シ聲音嘎嘶シ、口臭甚シ、流涎高度。

三月十三日 午前診、「デイガレイン」一筒皮下注射心臟衰弱ス、體溫三十八度五分、脈一三〇至、全身倦怠甚シク渴高度、口内ヲ診スルニ軟口蓋ヨリ咽頭ニ及ビ白色厚苔ヲ被ル、流涎甚シク、口臭甚シ、嚥下不能、一滴ノ水ヲトルチ得ズ、食鹽水注射一八〇〇・〇瓦、前日注射後數時間安眠セリ。

三月十四日 症狀前日ト大差ナシ、注射一八〇〇・〇、攝食不能、二〇%「カンフル」油二筒皮下注射、翌十五日ハ稍々少シク輕快、重湯一、二椀嚥

三月二十六日 目下治療中。

下シ得タリ、注射セズ。

三月十七日、午前一時頃胸内苦悶甚シトテ診ヲ求ム、心臟衰弱甚シ、「デイガレイン」一筒注射、心臟衰弱ノタメ危險状態ニアリ、同日午後注射一八〇〇・〇瓦、「カンフル」油二〇%二筒注射、攝食不能トナル嚥下不能。

三月十七日 症狀同、注射一八〇〇・〇瓦、二〇%「カンフル」油注射二筒、症狀同、嚥下不能、爾後二三日「カンフル」油注射ト食鹽水注射トヲ持續ス。

三月二十日診、咽頭ノ白色義膜ガ二、三小片トナツテ吐出、症狀少シク輕快、重湯及ビ粥チ一—二椀宛攝取シ得、心臟稍々良好、注射ヲ中止シ、「カンフル」散及ビ硝蒼劑内用トス。

三月二十四日 心臟衰弱ノ微アリ「デイガレイン」注射「カンフル」内服。